



子どもの自立 生きるということ、働くということ

大きな子ども、小さな子どもが群れ集い、守りつつ守られ、守られつつ守るという姿を見なくなった。子どもがおとなに混じって働く姿もまた見なくなった。こんな社会になったのは、長い人類の歴史のこころずか50年来のこと。人の育ちのありようとして、そこに大きなゆがみはないか。いまあらためて「子どもが働く」ことの意味を考える。

第1回 講演会 10月27日(土) 午後1時半～4時

働く若者たちの今 — 労働市場の変化のなかで

佐々木 賢 神奈川県高等学校教育会館教育研究所代表
日本社会臨床学会運営委員

場所：
記念館
2階講堂

要旨

今、人材派遣業は全国で7000社を超えました。雇用者は正規が3800万人、非正規が1700万人います。労働市場の大きな変化の中で、大卒や高卒の就職、女性の就職はどうなっているのでしょうか。フリーターやネットカフェに泊まるワーキングプアの若者、ニートやひきこもりがなぜ出たのでしょうか。世界の労働移動が激しくなり、外国人労働者は異国でどのように働いているのでしょうか。こうした労働の全体状況を説明します。

第2回 講演会 11月17日(土) 午後1時半～4時

「働く前に身につけよう、返事、挨拶、生活習慣」

佐藤 透 自然流自立塾 NOLA 代表 — 自立支援の現場から —

場所：
総合研究棟
N202室

要旨

煮詰まった家庭を一旦離れて、規則正しい生活で昼夜逆転や偏食などの生活習慣を整え、ボランティア活動や作業などで、体力や忍耐力、自尊感情などを養う共同生活寮、「自然流自立塾 NOLA」を吉野町の山里で代表の自宅を開放して行っている。その実績は、入寮した中学生の全員が半年以内に登校(成人寮生の75%が一年以内に就労)している。受容と共感、そして待つだけで決して解決しない、若者の社会参加に向けた現場の実践から得たノウハウを公開。

第3回 講演会 12月15日(土) 午後1時半～4時

体験学習があそびと学習と仕事を統合する

— きのくに子どもの村学園の「プロジェクト」のねらいと実際 —

堀 真一郎 学校法人きのくに子どもの村学園・学園長
元大阪市立大学教授

場所：
記念館
2階講堂

要旨

いま総合的な学習がピンチに陥っている。世の中にはびこる学力低下論におどらされて、子どもについても学校の現場についても素人のにわか教育論者が、「もっと算数を」「もっと授業時間数を」「土曜日にも授業を」などと声高に叫んでいるからだ。きのくに子どもの村小学校では、授業の半分以上が体験学習である。子どもと大人が話し合っ、大きな仕事に挑戦し、たのしく興奮しながら、広くて深い力を身につけている。教師中心で、教科書やドリル偏重の正反対の方式の実際を紹介する。

第4回 講演会 2月23日(土) 午後1時半～4時

新時代の大人化計画 — 若者たちの生活の情景を見つめて —

小浜 逸郎 国士舘大学客員教授・批評家

場所：
講堂

要旨

戦後、学校教育の大衆化がますます進み、教育年限も長期化の一途をたどっています。教育の機会均等が保障されたことは素直に喜ぶべきことですが、反面、子どもから大人への節目が見えにくくなったこともたしかです。ひきこもり、ニート、フリーターなどの若者問題は、学齢期の長期化による「通過儀礼の喪失」にその要因の一つがあると思われます。この講義では、教育と法と労働の三つの側面から、この問題に迫ってみたいと思います。



お問い合わせ先

奈良女子大学文学部 子ども学プロジェクト事務局(東村研究室)

電話 0742-20-3957 メール kodomo-gaku@cc.nara-wu.ac.jp

ホームページ <http://www.nara-wu.ac.jp/kodomo-gaku/index.html>

主催 国立大学法人 奈良女子大学文学部「子ども学プロジェクト」

後援 奈良県、奈良市、大和郡山市、奈良市教育委員会、大和郡山市教育委員会、奈良女子大学附属学校部